

秋季高体連

昭和46年（1971年）

《結果》	10月31日	11月3～6日	県立体育館
男 二回戦○膳所	99-38	高島	女 一回戦○膳所
準々決○〃	42-26	瀬田工	二回戦○〃
準決勝○〃	60-41	八日市	準々決○〃
決勝○〃	67-30	八幡工	準決勝×〃
	優勝（3連勝）		ベスト4

九連宝灯（チューレンポート）

—— 一生に1回あるかないかの勝ち方をして ——

マージャンで九連宝灯というあがり方（勝ち方）がある。大三元や字一色といったなまやさしい類のものではない。もっともとあがり方の難しいもので、一生に1回あるかないかといわれるほどのあがり方（勝ち方）の一つである。これであがった暁には、『死ぬ』といわれている。

× × ×

1. 秋季高体連前の練習、その他について

秋季高体連の組合せが決まった時に『一回戦、二回戦は問題なく勝てるが準々決勝での日野高校戦には負けてしまい、結局はベスト8どまりに終わってしまうだろう』というのが私の偽らざる予想だった。膳所高校の女子が『リハビリテーション』としてのバスケットボールをやっているのに対して、日野高校には日野東中学時代の素晴らしい素質を持った選手が多数入学している。（たしか、日野東中学が県体で連続優勝した学年の生徒だと思う）このことを考えただけでも、試合する前からすでに勝負が決まっている。日野高校がいまだに『中学校のバスケットボール』をやっているとしても『無名の選手でしかもリハビリテーション』としてのバスケットボールしかやっていない膳所高校にとっては、決して勝てる相手ではない。私自身、日野高校には200%の力を出して戦ったとしても絶対に勝てる相手だとは思っていない。

私のチームの選手は5人（マネージャーを入れて6人）、全員2年生である。来春、新入生が5人入部してこなければクラブは消滅してしまう運命にある、そういうなさけないクラブである。

だいたい、5人の部員だけで試合に勝とうなんて土台、虫がよすぎる。更に悪い条件が重なった。10月24日（日）に大津高校と練習試合を行なった時に、選手の1人である山本睦子が相当ひどい捻挫をした。選手が5人しかいないので、捻挫をしてもベンチにさげるわけにもいかなかったので、無理矢理そのまま試合を続けさせた。反対の方の脚でジャンプしながら走っていた。翌日医者にもてもらったところ、相当ひどい捻挫で秋季高体連の出場は到底無理だということだった。勿論、練習など到底出来る状態ではなかった。

更に、悪いことが続いた。この大会の前々日、つまり11月3日（水）文化の日、この日は試合がなかったので、午後学校で練習をやった。昨年、男子がこの大会で優勝していたので、優勝

カップを返すことを思い出し、彼女たちが練習している時間をみはからって学校へ優勝カップをとりに行った。体育館の中を覗くと練習をやるにはやっていたが、選手の1人がきていない。無断欠席である。明日から3日間（実際にはもうすでに始まっているが……）高体連だというのに、なんてことだと思い、「もう今日の練習は終わり。明日の甲賀高校との試合は棄権だ。今から甲賀高校へ電話してくる」と全身で怒って言った。その頃になって休んでいた山本睦子が現われたが、時すでに遅く、私の怒りは最高頂に達していた。遅れてきた山本が泣いていた。（この子は涙もろい）心を鬼にして事務室へ行った。（優勝カップをとり……。生徒には電話をかけに行くようなふりをして）

次の日（11月4日）の甲賀高校との試合はバカバカしくて、コーチなんかする気が全然おこらなかったの、もう1人の顧問の先生（部員の名前を殆んど知らない）にすべてをまかした。AコートとBコートの間にある役員席に坐って、見ているような見ていないような恰好をして生徒の試合を見ていた。気がそわそわして、なんとなく落ち着かない。『別に負けたってよい』と内心思っていたが、なんとなく落ち着かない。試合内容は圧倒的に膳所高校の方が優勢だし、点差も大きく開いているというのに。

前半の残り6分で、例の山本が5反則で退場となった。選手が最初から5人しかいないということはわかりきったことなのに。それも、前半で5反則である。だいたいにおいて精神状態がよくない。

さて、この後ベンチはどういう策をとるのかと思ってみていた。このまま4人で続けるつもりなのか？それとも全然練習していないマネージャーの三嶋滋子を出すのか？やはり、マネージャーが出てきた。成功するか？失敗するか？相手チームとの力の差が歴然としているので、別に成功とも失敗ともいえなかった。翌朝、この日のスコアブックを見て、マネージャーが7回ミスをしたことがわかった。7回のミスの内容は、オーバータイム3回、パスミス3回、ヘルドボールにされたのが1回である。これを見て今後、試合中にもし5反則者が出たときは交代せず、そのまま試合を続行した方がよいんじゃないかと思ったりもした。勿論、5反則者が出ないように、しつこく注意はするべきだが……。

膳 所 5 5 $\begin{pmatrix} 2 & 6 & - & 9 \\ 2 & 9 & - & 15 \end{pmatrix}$ 2 4 甲 賀

甲賀高校との試合が終わって次の試合が始まった頃、役員席に坐って、他の高校の先生と雑談を交していたら、女子の生徒が6人、どやどやとやってきて半円形になって、私を取り囲んだ。キャプテンの第一声が「お話したいことがありますのできていただけませんか」だった。『何を勝手なことをいいやる、このマヌケめが……』と内心思っていたが「今、よそのチームの試合を見ているところだ。そんな所（人の前）に立ったら試合が見られない。邪魔だからそこを退け」と大きな声でいってやった。やや横に動いて試合が見える位置に移動した。「お前ら、本当にやる気があるのか。やる気もないのに大きな顔して試合に出てくるな。さっさと消え失せろ」「わたしらは一生懸命やっています。日野高校に勝つために今まで一生懸命やってきました。お願いします。明日の日野高校との試合、是非コーチして下さい」とキャプテン。「やる気のないやつを相手にコーチしても、コーチするだけバカらしい」「そんなことをいわないで、是非コーチをお願いします」しばし沈黙が続いた。隣に他校の先生がいる手前、そう簡単に妥協するわけにもいかない。『コーチしてやってもいいな』と思う反面、やはりここで筋を通しておいた方が

よいと思い、「お前らをコーチしているとイライラして胃潰瘍になるからイヤだ」「なんとかお願いします」「キャプテンばかり『お願いします』と喋っているが、他の者はどうなんだ」といったら、他の者がみんな声をそろえて「お願いします」と恰好の悪い程、大きな声で頼んだ。隣に坐っていた瀬田工の横山先生が「こんなに頼んでいるんだから、コーチしてやれよ。ワシからも頼むワ」といって出しゃばった。どうせ勝てる試合ではないので、コーチしてもしようがない。以前にもこれとよく似たことがあって、その時は男子のマネージャーをしている2年生の野崎英雄にコーチをやらせたことがあった。誰か顧問がベンチに坐らないと公式戦が出来ない(高体連申し合せ事項)のでやむなくベンチに坐るだけは坐ったが、その時は一言もしゃべらず、すべて野崎に委した。20分程前にもう1人の顧問の先生が「明日、進学説明会のためこられない」といつてきたので、誰か引率教諭がベンチに坐らないと試合が出来ないので、「男子のマネージャーの野崎にコーチを頼んでこい。彼がコーチを承諾したら、コーチはしないがベンチにはしようがないから坐ってやろう。野崎にコーチをしてもらえ」

みんなで野崎を探して、コーチを頼みに行った。彼のことから、『絶対いやだ』ということはないことは百も承知だった。しばらくして彼女たちが戻ってきた。「野崎君が『やってやる』と喋ってくれましたので、明日、是非コーチをお願いします」「お前ら、アホとちがうか、まだコーチしてくれといってるけど、オレはただ、ベンチに坐るだけだぞ」「それでもかまいませんからお願いします」ときた。「お前ら、どこまでアホや。とことんまでアホやなア。もうわかったから、早う帰れ」「お願いします」とまたまた頭をペコンとさげて、帰って行った。

さて、明日の試合はどうなることやら。

(守山高校の辻一彦先生にいわせれば、これが『膳所高校の作戦だ』ということになるらしいが、こんな方法で日野高校に勝てるとは決して思っていないし、また決して意図的な作戦でもなんでもないんだ。だいたい、彼はつまらないことに気をまわしすぎる。だから、強いチームが作れないんだ。スケールが小さすぎる)

2. 試合当日

(1) 試合の前

今日は男女の準々決勝8試合が行なわれた。第1試合(女子)の八日市高校対守山高校の試合は当然守山高校が勝つだろうと思っていたところ、結果は以外にも八日市高校が勝った。

(50対46)聞くとところによると八日市高校の中に日野東中学からきた選手がいるとのこと。

膳所高校もやはり日野高校には勝てないだろうと思いながら、第2試合の男子、膳所高校対瀬田工の試合のベンチについた。この9月に行なわれた第6回大津市民大会の決勝戦でトリブルスコアで勝っているので、今日の試合では、トリブルスコアまたはそれ以上の試合をするよう、選手に注意を与えた。前半は予定の行動で試合が進んだが後半がいけなかった。全然シュートが入らず、試合が終わった時には、16対17と後半に関してみた限り負けている。終わりの挨拶が終わるや否や、体育館の片すみに選手を集めて、「こんなことでは、明日の準決勝、決勝は到底勝ち目はない……」とこんこんと説教していた。その時、次の試合の3分前を知らせる審判の笛が鳴った。第3試合は女子の膳所高校対日野高校の試合である。『女子の方は、どうせ勝ち目がないし、試合直前に行って、ベンチに坐っているだけでよいだろう。それよりも、明日の男子の試合に勝つことの方がより大切だ』ということを考えつつ、なお説教を続けた。試合開始を知らせる合図が鳴ったので途中で説教をやめて、マネージャーの野崎と共に、急いで女子のベンチへ

走った。

5人しか選手がいないので、誰がスタートメンバーかをいう必要もないし、また、先日から女子には頭にきていたので、試合前に注意もせずにはいた。野崎も何もせず、何もいわず、ちよこんとベンチに坐っていた。『コイツ、あまり頼りになりそうにない』と思いながら……。

(2) 前半開始

ベンチには、私と野崎、それにマネージャーの三嶋、更にOGのヒロミ、バスケット部の3年生の女の子数人とカワイ子ちゃんが1人、坐っていた。

中島主審によるトスアップで試合開始。センタージャンプでうまくボールを取ってシュートに持っていくも、例の山本がシュートミス。日野高校にリバウンドを取られて速攻を出され、早くも先取点を取られた。2回目の攻撃の途中で、この日のヒーロー(いやヒロイン)である北本恒子がヘルドボールされて、ジャンプボール。このジャンプボールを取られて相手のボール。取られたボールをなんとかして強引に取りかえそうとして、先程の北本がファール。相手にフリースローを与え、1本入って、早くも、0対3。次の攻撃の途中で、キャプテンでリードマンの堂口浩子がドリブル中のボールを取られて速攻を出されて、0対5。これで万事休す……。しかし、その直後、普段からあまりシュートの入らない住谷玲子や素人の河野純子のシュートがよく入って、僅少差でくっついていくも、残分15分で住谷が早くも3反則を犯してしまった。たまたま自ベンチの前で起こったファールだったので、急いでチャージドタイムアウトを請求した。(膳所高校の選手は男女共体力がない。特に女子の方はそれが顕著であるので、試合中、適当にタイムアウトを請求して、選手を休ませてやるのが大切であると同時に、選手が相手ベンチ前にいる時には、出来るだけタイムアウトを請求しないようにすることが大切である。何故ならば、コートを往復する距離分だけ、彼女たちの疲労が増大するからである)そしてベンチへ歩いて戻ってきたすでに3反則を犯した住谷の頭・腰・足を手と足を使って殴り倒してやった。このことがよかったのか悪かったのか、すぐに追いつき、少しリード出来た。その途端、先程の住谷がファールを四つ目、五つ目とたて続けに犯してしまった。時に残分6分、得点は18対15。(3点リードしている)5反則を犯した住谷のかわりに、昨日のようにマネージャーの三嶋を出場させるべきか、それとも、このまま4人で試合を続行させるべきか、随分と迷った。即坐に結論を出さなければいけない。隣に坐っているマネージャーに「お前、出るか?」と聞いてみたところが、いやな顔をして「いやです」といって、今にも泣きそうな顔をした。すぐに、オフィシャル席に走って、タイムアウトを要求した。(この時はたしか、膳所高校の選手は相手のベンチ前にいたが、そんなことは今はどうでもよい。今は選手を落ち着かせて、よい策を授けることの方がより大切だということでタイムアウトを要求した)

試合前を含めて試合が始まって今までの間、この試合に『是が非でも勝ってやろう』という気は微塵にもなかったが、5反則退場者が出て4人になった瞬間から『絶対に勝つんだ』『絶対に勝たせてやるんだ』という気が起こって、今までおとなしくベンチに坐っていたのをやめて、大声でアドバイスしたり、ベンチから立ち上がって、体全体でプレーを指示する、そういう態度に変わってしまった。このタイムアウトで、4人の選手に注意したことは次のようなことだったと記憶している。「まあ、水でも飲めよ」と少し落ち着かせてから、「もうこれ以上、5反則退場者が出てはとて試合が出来ないので、ディフェンスは4人で正方形をつくって、こじんまりと守り、相手に外側からシュートを打たせてリバウンドを取って速攻を出すように。速攻が出せずに

セットオフenseになった時には、相手のディフェンスがゾーンかマンツーマンかをよく確かめて練習でやったフォーメーションプレーを使って、5人对5人の時と同じ要領でやればうまくいく」

かくして、前半より、4人对5人の試合が始まった。相手のチームにとっては、こうした変則的な形の試合は始めてだろうが、こちらの方は、普段の練習に5人全員が満足にそろって練習をやるということが少なかったのだから、幸か不幸か、普段の練習における経験がこの試合で大いに役立つという皮肉な結果となってしまった。そのためか、4人对5人になってからの前半の残りはベンチワークも相まって、5人对5人の時よりも迫力のある、素晴らしい試合を展開する結果となった。4人になってからの残り6分間は、8対4とダブルスコアの得点となった。

結局、前半は、26対19の7点差で終わった。

(3) ハーフタイム

ベンチの後の壁にもたれて、どっかりと腰をおろして、何から話をしたらよいやら、乾いたのどを水を飲んでうるおしながら考えた。特に前半、7点リードしているのだから、かえって精神的に負担が大きいような感じがした。顔は紅潮し、心悸亢進が起こり、言葉はどもり勝ちになった。「『どうせ、そのうちにやられてしまうだろう』と内心考えながら、車座になって次のようなことを生徒に話した。

「前半から、5反則をしたアホがいるが、かえって、4人で試合をしている時の方が、5人で試合をしている時よりも、一人一人がいいプレーをしている。(皮肉をこめて、また、前半で5反則した住谷を無視したようにしながら)前半の最後の時のような気持ちで後半も戦ってみろ。ディフェンスは前半と同じく、4人で小さく正方形をつくって守り、外側から打たせて全員でリバウンドに参加し、取ったらとにかく速攻を出せ。なにがなんでも走りまくれ。これが出来たら後半も勝てる。ディフェンスを小さくして守って外側からシュートされて入れられてもそれはしょうがない。シュートなんてそんなに入るものではない。オリンピック選手でさえ、試合中のアウトシュートは2本に1本入るか入らないかぐらいだから。もし、外側からのシュートが入ったとしても、それは交通事故だと思ってあきらめろ。それから、速攻を出したけどどうも攻められないときは、セットオフenseに持ち込んで、相手のディフェンスをよく確かめて、フォーメーションプレーを使ってじっくりと攻めよ。30秒のオーバータイムを2〜3回取られてもかまわないから……」と前半の最後にとったタイムアウトの時と始んど同じような注意を与えた。「そして、この一戦の勝敗は後半のスタート約5分間にある。前半の終わりの勢いで先取点を取って、こちらが主導権を握れ。それが出来なければ少なくとも五分五分で試合を進めよ。この一戦の勝敗は後半の出足で決まる。それから一つだけ、いいことを教えてやろう。後半の最初のセンタージャンプの勝ち方を。周囲の4人や3人は相手のジャンパーの目の動きをよく見ておけ。高校生は単純で素朴そのものだから、ジャンパーはジャンプをする前に必ずタップするところをなにごなく見るものだ。だから、相手チームのジャンパーが見たところを意図的に空けておいてタップされた瞬間にとび出せば、簡単にボールをうばうことが出来る。お前たち、もっと悪い頭を使え」

(4) 後半に入って

ハーフタイムの時の一番最後に話した注意がみごとに的中した。相手のジャンパーのタップしたボールを、流石、キャプテンの堂口、うまく狙いうちしてそのボールを獲得し、ドリブルでシュートへ持って行って得点し、後半の先取点を取って9点差とリードし、より一層得点差を拡げた。守っては素晴らしいディフェンスをするし、攻めては素晴らしい速攻が出るし、膳所高校という

チームは、まるで速攻を武器とするチームであると思わせるような本当にすごい試合をした。相手がはじめて得点したのは、後半開始後5分経ってからのことで、それもしかアウトシュートによる得点だった。その時点での、後半だけの得点は10対2で、前半の得点をあわすと34対21と13点差の圧倒的なリードだった。『これ以上、5反則者が出なければ、このままおしきって勝てるのだが……』と思っていた矢先、河野が四つ目、五つ目の反則をたて続けに犯してしまった。この時、残分5分だった。特に5本目のファールは痛かった。ベンチから見ていたら、明らかにオフenseファール(チャージング)なのに、ディフェンスファールをとるなんて。四つ反則をしているのでディフェンスは何もせず、ただ棒立ちになって立っているだけのところへオフェンスの方がぶつかりに行っただけのことなのに……。大たい、こういうファールの取り方かしらないから、滋賀県のバスケットボール技術は向上しないのだ。井戸の中の蛙では困る。しかし、文句をいってもはじまらない。今は残った3人でいかに戦うかが問題なのだ。残った3人の選手がマネージャーの三嶋に向かって「出場せよ」といっていたが、ルール上、今更、試合に出場させることも出来ない(らしい)し、こちらとしても試合に出す意思も毛頭なかったので、知らん顔して、チャージドタイムアウトを請求するためにオフィシャル席へ走った。この時のタイムアウトの請求は、味方に作戦を与えること以上に相手により多くの作戦を与えることになるので、非常に危険だったが、あえてタイムアウトを請求することにした。このタイムアウトの結果がどちらの方のチームに転ぶか、へたをするとツキが相手に移るかもしれないが……。私自身にとっては3人で試合をするのはこれが二度目のことである。相手のコーチにとっては恐らく初めての経験であろう。そのため、随分戸惑うことだろう。その点、私は過去に一度、そういう経験をしているので比較的有利だ。今から3年前の9月に、大津市民バスケットボール大会の高校女子決勝戦で大津商との試合で、前半の途中から早くも4人になり、後半の最後に3人になって勝ったことを思い出した。相手が弱ければ3人でもなんとかゴマ化して勝てるのだが、今日の相手は、ちょっとやそつとゴマ化して勝てるような相手では決してない。これで万事休す。何もかもおしまいだ。家へ帰って寝てTVでも見ている方がまだ……。

その時のタイムアウトで、3人の選手に注意したことは、「現在の得点は50対37でお前たちは13点も勝っているのだぞ。5人で試合をしようが、3人で試合をしようが、そんなことは関係ない。今までやってきた強行策で残った時間、戦って行け。ただし、ファールはもうこれ以上犯さないように。3人しかいないので、ディフェンスは正三角形をつくって小さく守り、今までと同じように外側からシュートをさせて、リバウンドを取って速攻を出せ」ということだった。

4人になってからは完全に膳所高校のペースで試合が進められたが、3人になってからは、ほぼ五分五分で一進一退の試合が続いた。点差は始んどそのまま、時間のみが、ほんの少しずつ経過して行った。この時間の経過は非常に長く感じられ、何回見ても残分表は同じ数字を示していた。

一方、相手のディフェンスはこちらが3人になった途端、ベンチからの声の指図によって3:2ゾーンディフェンスから、オールコートのマンツーマンディフェンスにきりかえてきた。プレスディフェンスに苦しめられながらも、ぎこちないボール運びであったが、なんとかシュートまでは持って行っていた。五分五分で進行していたのでは、相手のチームはどうしてもあせらざるをえなくなってくる。このままでは試合に勝てないと判断したのか、再びベンチからの指図で、オールコートのマンツーマンディフェンスをやめて、後へさがって、3:2ゾーンディフェンスを

しいた。膳所高校にとっては、これでボール運びによる疲労は相当減少するので助かった。セットを組んでからのみ、一生懸命攻撃したらよいからである。このあたりが、日野高校のチームにとっては大きな誤算だといえよう。しかし、このままでは、まだまだ勝てる状態ではないので、とても安心は出来ない。生徒がディフェンスをしてボールを取った（丁度ベンチの前でディフェンスをしている）瞬間、ベンチから立ち上がって生徒に大声で「速攻だ。走れ。行け。それ行け」と怒鳴りながら、我を忘れてサイドラインに沿って、オフィシャル席まで右手をななめ上にあげながら（ベンチはオフィシャル席の左側にある）走った。今から考えてみると、よくこんなバカなことをやったものと恥ずかしく感じると同時に、審判がよくもテクニカルファールを取らなかったものだと、内心、うれしく思ったりもする。そして、2人の審判に深く感謝する次第である。

この頃より、県立体育館2階の観客席にバラバラに坐っていた観衆が、こちらの試合を見んものと多数集まってきた（ようだ）。そして、膳所高校のチームがボールをうばってシュートして入れようものなら、2階の観客全部が、体育館が割れるほどの声援をしてくれた。1階のベンチにいて、2階の観衆の拍手やどよめき等を聞いていると一種異様な雰囲気を感じられる。私のコーチ生活の中で、このような経験ははじめてのことである。これは、当事者の私（そして日野高校の小森先生）しか経験の出来ない貴重なものだった。コートの中にいた8人の選手はこの異様な雰囲気をどう受けとめていたか、特に膳所高校の選手がシュートを入れると館内がどよめくのに、日野高校の選手がシュートを入れても水を打ったような静けさである。試合をやりながら、相手チームの選手はどう感じたろうか？また、膳所高校の選手自身はどうだったろうか？

3人になる前後から、沢山フリースローをもらった。それなのにフリースローを連続10本も落としている。せめて、この半分でも入っていたら、もつともつとリード出来ていただろうに。

やっと3分をきって、赤タイムに突入した。3人の選手の疲労が目に見えて現われてきた。この辺でタイムアウトを請求して、水でも与えて元気を出させないといけないんじゃないかと考えながら、一方、タイムアウトを請求することによって相手のチームのコーチから作戦を与えさせることになると思い、心を鬼にしてタイムアウトを請求することをやめた。（試合が終わってスコアブックを見て気がついたことだが、日野高校は後半に入ってすでに2回タイムアウトを取っているものとばかり思っていたら、タイムアウトを一度も請求していないことがわかった。今から考えてみると、タイムアウトを請求することを控える必要はなかったわけである）

赤タイムの残り時間が1分から2分の1の計時に移った瞬間、またまた、とんでもないアクシデントが起きてしまった。相手に速攻を出された時に、粘って追いかけたのはよいが、シュートする時にポイントゲッターの北本がプッシングのファールを取られてしまった。その時、シュートは入らなかったが、相手のフリースローである。ファールをした北本は5反則の退場である。これで、3人目の退場者となった。残るは、キャプテンの堂口と足の捻挫で殆んど動くことの出来ない（役に立たない）山本の2人だけとなってしまった。今しがた、残分表が2分の1になったばかりなので、まだ50数秒は残っているはずだ。この50数秒間を2人对5人で試合をしなければいけない。どうして攻めて、どうして守ったらよいのかわからない。3人の時には過去にそういう経験をしていたので、なんとか対策を講ずることは出来たが、今度は2人である。今度ばかりは策がない、全くの無策である。この時の2人のファールの数は、堂口が1本（流石キャプテンだ、いやディフェンスをせずにサボっていたのだらう）足の悪い（頭も悪い）山本が2本。もう1人、5反則退場者が出ると没収試合になるが、この反則数から考えるとそのような心配は

どうやらなさそうだ。この時の得点は、52対41で11点のリードである。フリースローの第1投目が入り10点差。こちらは2人しかいないので、2人でフリースローのリバウンドに参加したのに対して、日野高校は5人でリバウンドにきたのでかわない。第2投目を(軽く)落とされ、リバウンドを取られてシュートを入れられ、8点差となる。残り時間は殆んどそのまま、残分表は相変わらず、2分の1のままである。やはりこれまでかと、半分あきらめた心境でいつつ、ベンチを立ち上がって2人に体と手と口と足で、つまり早くいえば全身で、あれやこれやと教育ママのごとく、指図した。2人のうちの1人がスローインするともう1人のものがコート内でそのボールを受けなければいけないが、相手が2〜3人(5人ではない)で取り囲みにきたので、たまらない。2本続けてパスミスをした。それがまた2本共、相手の得点に結びついたので、差は4点と大きく縮まった。だいたい、このスローインのやり方がおかしい、間違っている。堂口がスローインして、足の悪い山本がディフェンスをふりきってボールを受けようとするところに無理が生じるのだ。パスミスを2本続けた原因がここにあることを両手を口にあてて、メガホンがわりにして、死にものぐるいで怒鳴った。2人はこれに気がついて、やっと、ポジションを交替した。残分表は4分の1を示していた。20数秒はありそうだ。いくらでも逆転される可能性はある。右隣にあるオフィシャル席に坐っている瀬田工の生徒(前の試合で負けたのでオフィシャルをしている)に祈るような気持ちで、「早く試合を終われよ」といってやった。2人のポジションを入れかえたかきがあつて、3回目のスローインはうまくいった。堂口がディフェンスをふりきって山本からボールを受けるや否や、全力をふりしぼってドリブルでディフェンスを2〜3人、次々と抜いて行き、センターラインを越えてフロントコートにボールを運ぶことに成功した瞬間、ディフェンスがファールをした。幸運中の幸運である。1点でも余計にほしいところである。2人しかいないので、フリースローは入っても入らなくても速攻を出される心配があるので、山本がセーフティマンとして残り、フリースローのリバウンド参加者はゼロだった。第1投目は入らなかった。この試合、これで11本連続して落とすことになる。第2投目は落としたりリバウンド参加者がいないので、100%相手チームのボールになる。しかし、フリースロー12本目にして、やっと入った。これで5点差である。この時、確か、残分はまだ、4分の1だったと記憶している。2人がどういう形でディフェンスしていたか全く覚えていない。覚えていないというよりも、相手が早いペースでボールをフロントコートへ運んできて、シュートへ持ち込んだので、ディフェンスをする余裕が殆んどなかったのである。幸いなことにそのシュートは入らなかった。背の低い2人の選手が必死にリバウンドにとんだがとれない。5人には勝てない。やはり、リバウンドというものは参加した人数の多い方のチームが取らんだということが痛い程、よくわかった。リバウンドを取られて、再びシュートされるも、あせつていてまたもや入らない。相手も必死であれば、この2人も必死である。相手に何回も何回もリバウンドを取られてシュートされているが入らないので助かった。その瞬間、次のようなことを考えた。『今度、もしシュートを入れられたら、スローインをあわててせずにエンドラインの外でボールを5秒間保持していたら、5点差なので合計10秒間はなんとか持ちこたえることが出来る』と。得点差の割に時間があすぎるので、この計算はボツになった。(参考までに。残り2分の1で24点以上差があれば物理的に考えて、絶対に逆転することは出来ない。バスケットボールも試合運営を考えて、コールドゲームというのを一つ考えてみてはどうだろう)ゴール下で何回も何回も(恐らく4〜5回はあったろう)相手がシュートミスをしている時に、オフィシャル席で笛が鳴

った。残分はまだあるはずなのに何の笛だろうと思っていると「試合、終わりです」とオフィシャル席から声がかかった。勝った。勝ったのだ。本当に勝ったのだ。しかも2人で。本当に御苦労さん。まるで夢のようだ。2階で声援してくれた観衆のみなさん、ありがとう。

試合が終わった途端、最後まで残った2人がフロア上に泣き伏して倒れてしまった。そしてベンチにいる5反則退場者3人とマネージャーも一緒に号泣してフロアに泣き伏した。「最後の挨拶までしっかりやってこい」と彼女たちの重い体を次々に持ち上げて、背中を強く押して挨拶に行かせた。その瞬間、あの時（3年前の9月の大津市民大会の決勝戦）と同じように熱い涙が目頭から数滴、こぼれ落ちた。

『もう勝った。もうこれで勝った。安心だ』と思ったことは一度もなかった。

本当に劇的な試合だった。最後の最後まで気の抜くことの出来ない、緊張した長い長い40分間だった。こんな試合は私の一生を通じて恐らく二度とないだろう。5反則者が多く出て2人で試合をするということはしばしばあるが、そういう場合は大抵、2人になったチームが負けているし、たとえその時リードしていても、そのうち逆転されて結局は負けてしまうのが常である。2人で試合に勝つ、なんてことは常識では考えられないことだ。しかも、相当な実力を持っているチームを相手に。これこそまさしく、九連宝灯であがった（勝った）ようなものである。一生に一回あるかないかのことである。

(5) 挨拶から戻ってきた選手に話をしたこと

起死回生とはことをいうんだ。死んだ3人が再び生きかえったんだ。

今日の経験は、これからの長い人生でいろいろと役に立つことだろう。お前たちは人が経験したことのない貴重な経験をした。今日のこの貴重な経験をこれからの人生に生かしてほしい。それから、秋季高体連でベスト4に残ったのは今年がはじめてではない。去年（3位）も一昨年（優勝）もベスト4に残っている。これで3年連続ベスト4に残ったことになる。何も勝って不思議ではない。勝ってあたりまえだ。何もお前たちだけの力で勝ったのではない。過去の先輩たちが築いてくれた伝統（財産）という目には見えないものによって勝ったのだ。ベスト4という成績はいわば上昇気流にのって得た成績である。明日の試合に勝たないことには話にならない。今年の冬（昭和46年2月）までは、数年間連続してベスト4だったのに春季高体連以後、全国大会二次予選、県体と連続してベスト4の座からベスト8に落ちてしまったが、これらはすべて今のお前たちの責任だ。これでやっと伝統のベスト4に返り咲くことが出来た。考えてみれば、勝って何も不思議なことではない。勝ってあたりまえのことだ。たかがこんなことぐらいで勝って泣くようじゃ、ダメだ。

3. 後日談

キャプテンが後日、こういう話をした。「2人になってから、シュートを2本続けて入れられた時に、次にもしパスミスをしそうだったら、5秒間ぎりぎりエンドラインの外でボールをキープして、5秒の時にボールが向こう側のエンドラインを割らない程度に無茶苦茶投げようと思っていました。時間かせぎのために……」なかなかいいことを考えていたなあとほめてやったら「2階で応援していた1年生の男子が大きな声で、『ボールを無茶苦茶、前の方へ投げろ』と怒鳴っているのを聞いて、それをやろうと思ったんです」と余裕のあるところをみせてくれた。

考えてみたら、人数こそ少ないが、どの選手を取り上げてみても、みんな性格的に『気の強い』『負けん気の強い』連中ばかりだ。そうでなかったら、5人だけのメンバーでここまで練習や

試合で勝ち進んでこれなかったはずである。

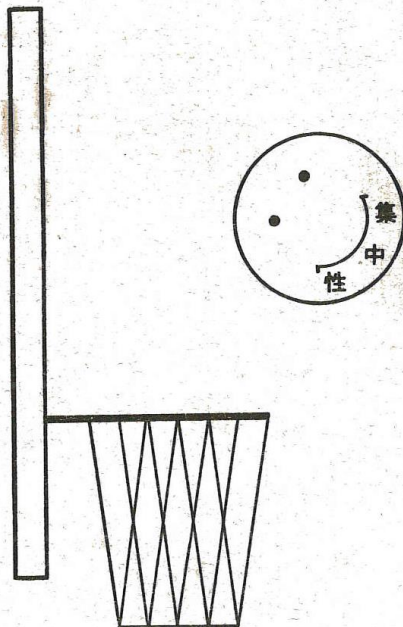
この試合の翌日に、彦根工の小堀先生がこの試合を見ていて、次の第4試合の対八幡工との試合で、彦根工の生徒に『ものすごく勇気を与えてくれた』と私に話してくれた。

また、この試合を見ていた1人でも多くの高校生に、自分たちでもやればやれるんだという『勇気』と『自信』を与えてくれたと思う。

6人の選手よ、ありがとう。

マネージャー	三嶋 滋子	選手 主将	堂口 浩子(付属中学出身)
	(松原中学出身)		北本 恒子(甲西 〃)
			山本 陸子(松原 〃)
			住谷 玲子(付属 〃)
			河野 純子(守山 〃)

コーチ10年の記録



滋賀県立膳所高等学校

バスケットボール部

顧問 須田 武志